武藤禎夫編

噺本大系

第十九巻

東京堂出版刊

編者略歴

大正十五年、東京に生まれる。東京大学国史学科卒業。朝日新聞社出版局勤務。出版校閲部次長、日本古典全書編集長を歴任。編著に『江戸小咄辞典』『落語三百題』『江戸小咄の比較研究』（東京堂出版）『昨日は今日の物語』（平凡社東洋文庫）『日本小咄集成』（共編、筑摩書房）『軽口咄本集』（古典文庫）など。

噺本大系　第十九巻　定価七八〇〇円

昭和五四年一二月二〇日　初版印刷
昭和五四年一二月三〇日　初版発行

編　者　武藤禎夫
発行者　岩出貞夫
印刷所　理想社印刷所
製本所　協和製本株式会社

発行所　株式会社　**東京堂出版**
東京都千代田区神田錦町三-七（〒一〇一）
電話　東京　三二三三-三七四一　振替　東京　三-三七〇

3393—354195—5164

© 1979 Sadao Mutō

凡例

第十九巻には、特殊噺本のIとして、通常の噺本とは、表現形式や内容面で特に変化のみられる画噺・百面相、一口咄・際物咄などの特異な噺本九種と芝居絵落噺の貼込帳一冊、さらに優婉な擬古文で綴られた雅文笑話本二種を所収した。また、序文や巻頭の数丁・数話を新たに作っただけで、既刊本の板木を大部分利用しながら、別の書名で新作をよそおって出板された細工本、いわゆる嗣足改題本の例として、元板が本大系に所収されている江戸小咄本のうちから、主要なもの二十五種を付載し、元板との関連を示した。いずれも、噺本に変化を持たせる趣向として刊行されたものであり、噺本の多様性を知る上でも、意味があるものといえる。

まず、書名と刊・序年、作・序者名、画家名、板元、書型、底本の所蔵文庫（架蔵本は省略）などを記した。この場合、書名は、内題・序題・題簽などによって記し、刊記のないものは序の年月を示した。江戸以外の板元は地名を付し、相板のときは「○○等板」とした。また、原本の体裁を知るため、本文巻頭をカットで示した。

翻刻にあたっては、底本の忠実な活字化につとめると同時に、読み易いものにするよう努力した。その方針は、概ね次の通りである。

1　本文の行移り・丁移りは、底本に従わなかった。ただし、底本の各丁の終りにあたる所に、版心の丁付により、丁数を括弧内に漢数字で示した。例えば、一丁の表と裏は（一オ）（一ウ）で示し、挿絵がつづく場合は（一ウ）（二オ挿絵）、（一オ）（一ウ―二オ挿絵）などとした。底本に丁付を欠くときは、洋数字で実丁数を記した。

2　句読点は、底本にとらわれず、私見によって句読点・並列点を施した。

3　小文字や割り書きは、人名とか評語、ト書きその他、意味のある場合のみ再現し、他は本文に組みこんだ。歌句は、改行して、理解の便を図った場合もある。

4　仮名について

イ　仮名の字体は、現行の平仮名・片仮名に統一した。「リ」「り」、「ヤ」「や」、「ツ」「つ」などは判別しにくいため、概ね平仮名にした。また「江」「子」は「え」「ね・ネ」とした。ただし、当時平仮名の意識で使用されていた「ミ」「ハ」「ニ」は読み易さを考え、そのまま残した。小文字の送り仮名は、概ね大きくした。

ロ　特殊な合字・連字は、現行の字体に改めた。（例、〆→シテ、ゟ→さま）

ハ　仮名遣いは混乱しているが、底本通りとし、歴史的仮名遣いには改めなかった。

ニ　本文の清濁は、底本では、当然濁点のあるべき所に、ない場合が多いが、私に加えることはせず、底本通りとした。ただし、濁点の位置のずれは正した。（例、おとがし→おどかし、こどく→ごとく）

ホ　誤字・誤刻と思われる仮名も改めず、行間に（ママ）（○○カ）と注記した。

ヘ　衍字と考えられるものも削らず、（ママ）（○○衍）と注記した。

ト　振り仮名も底本の通りとし、削除したり補わなかった。「限（かぎ）り」などの衍字もそのままとし、「空（そ）」などとした。ただし、位置のずれは正した。（例、奈良（なら）→奈良（なら））

5　漢字について

イ　字体は原則として新字体を用い、新字体のないものは通行の旧字体を使った。ただし、固有名詞などで、底本のままにした場合もある。

ロ　異体字は、できる限り、新字体または通行の旧字体に改めた。（例、杢→松、喜→喜、秋→秋、遠→違、庵→庵、煮→煮）しかし、該当する字のない場合（例、姥、泪、姫）は、そのまま残した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ハ　宛字及び通行の久しい文字は、注記せずに残した。（例、百性―百姓、有時―或時、陳所―陣所）ただし、極端なものは（ママ）とか、正しい字を（　）内に注記した。

ニ　特殊な草体・略体は、通行の文字に改めた。（例、ハ→候、ス→也、ヒ→被、タ→給、阝→部、井→菩薩、厂→雁、广→摩・磨・魔）

ホ　誤字・誤刻と思われるものはそのままとし、注記を施した。

6　反復記号は、底本にしたがい、「〻」「丶」「〻」「〳〵」の四種を使用した。

7　挿絵はすべて収録した。その位置は、該当するの咄中か、近い場所に挿入し、原本での丁数も明記した。後人のいたずら書きなどは消したが、他は修整を加えなかった。なお、挿絵やカット用の本文巻頭写真で、原本には匡郭のないものもあるが、体裁上、枠で囲った。

8　序文中の印や、奥付・刊記などは、できる限り、原形を示した。

9　底本の虫損・汚損などで判読できぬ個所は、同一板本で補えた場合は特に注記をせず、推定しうる場合は（〇〇カ）と注記し、全く不詳のものは、空白のままにした。

10　題名のない場合は、一行空きとして仮題は付さなかつた。ただし、『しみのすみか物語』は上欄に〇を記すのみだが、目録にしたがって、各題名を〔　〕内に示した。『臍煎茶呑噺』『縁取ばなし』など、全篇無題の書は、検索の便を考え、各話の冒頭にそれぞれ洋数字で、通し番号を付した。また、『一口ばなし』のサゲの部分の大文字は、太字で示した。

11　謡の詞章に付したゴマ点や、特殊な囲みなどは削除した。文中の特別な図柄は、凸版で示した。

12　諸本などで話の異同出入のため特記を要するものは、補遺の形で、巻末の「所収書目解題」中に付加した場合がある。

13　「嗣足改題本二十五種」では、まず簡単な解題を記し、以下、新刻分の序や本文・挿絵だけを紹介した。元

板の板木を使ったその他の部分の本文と挿絵は省略し、元板との関連のみを明示した。

14　第十六巻までは刊行の順に収録し、絵入りや特殊な噺本を第十七巻以降に特集した。

15　各巻末に「所収書目解題」を付した（本巻所収「嗣足改題本二十五種」の分のみはその項）。そこでは、簡単な書誌と、諸本との異同などを略記するにとどめた。

16　できる限り完本の紹介を心がけたが、一部が落丁や汚損で不備なものでも、未翻刻で内容のよいものは、あえて所収した場合もある。

底本に使用した原本は、主として公共の図書館・文庫や大学の研究室・図書館所蔵のものであるが、一部は架蔵本も用いた。完本を求め得ず、二、三の本を併せ用いた場合もあるが、その一々は記さなかつた。

第十九巻で、原本の閲覧と公刊を許可された図書館・研究室は次の通りである。記して深く謝意を表する。

国立国会図書館・都立中央図書館東京誌料・東京大学国語研究室・同国文研究室・大東急記念文庫・上田市立図書館花月文庫

目次

凡例 三
即当笑合（寛政八年秋序）……三
臍煎茶呑噺（寛政十二年序）……二四
画ばなし当時梅（文化七年十二月刊）……三六
身振噺寿賀多八景（文化十一年正月刊）……六五
百面相仕方ばなし（天保十三年正月刊）……七八
一口ばなし（天保十年頃刊）……一〇四
縁取ばなし（弘化二年正月序）……一三
万燈賑ばなし初・二編（五年正月序）……一三三
大寄噺の尻馬初編（嘉永頃刊）……一四四
〔芝居絵落噺貼込帳〕……一六八
しみのすみか物語（文化二年正月刊）……一八〇
白癡物語（文政八年夏序）……二三三

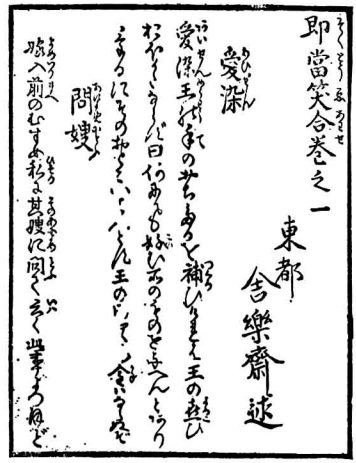
嗣足改題本二十五種……二六一
嗚呼笑（安永十年正月序）　二六二
富久喜多留（天明二年正月序）　二六九
話問訥（天明二年正月序）　二七四
猫に小判（天明五年正月序）　二七九
十千万両（天明六年冬序）　二八五
室の梅（天明九年正月序）　二九〇
年の市（天明頃序）　二九八
駿河茄子（寛政二年頃刊）　三〇五
落咄梅の笑（寛政五年正月序）　三一一
松の内（寛政十三年頃序）　三一六
笑顔始（文化五年正月序）　三二五
落咄春雨夜話（文化六年正月序）　三三四
咄の蔵入（文政三年正月序）　三四〇
梅屋舗（安永頃刊）　二六六
語満在（天明二年正月序）　二七一
話句翁（天明三年正月序）　二七六
扇子売（天明六年正月序）　二八二
評判の俵（天明八年正月序）　二八七
ふくら雀（天明九年正月序）　二九四
御慶三笑（寛政二年正月序）　三〇二
大神楽（寛政三年正月序）　三〇八
戯話華麟（寛政五年正月序）　三一三
福助噺（文化二年正月序）　三一九
恵方土産（文化六年正月序）　三二一
亜良井粉（文化九年頃序）　三三七
所収書目解題　三四七
あとがき　三六〇

噺本大系

第十九巻〈特殊噺本Ⅰ〉

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

即当笑合〔題簽〕


即當笑合卷之一
東都
舍樂齋述
愛深
問嫂

寛政八年秋序
舍楽斎作
赤蘿序
半紙本四巻四冊

序

一生の間は、白駒の隙を過るか如し。口を開ひて咲こと、真に幾回そやと、むだことゆつて、度〻腸の洗濯してこそ、太平の御代の民とハいはめ。（序一オ）斯る時ならてハならぬからとて、唐くにのしかた話しまても書集めて、当世のおとかひを解んと擬する耳

丙辰秋日　東都　赤蘿識（序一ウ）

〔絵詞〕
おもひつきをあんじをして、しこたま、こだんとかねもふけをしてやろう

（一オ）

即当笑合巻之一

東都
舎楽斎述

愛染

愛染王の手のおちたるを補ひけれは、王の喜ひ、おほかたならず。曰、何にても好む所のものを与へんとありけるに、そのおとこ、いはんとす。王の曰、ア、是、金ハならぬぞ

問嫂

嫁入前のむすめ、私に其嫂に問て云く、此事よつほど（一オ）楽しミになるものかへ。嫂の曰、けしからぬ楽しミさと。娘、嫁入して後、里帰りのとき、嫂を見て恨めしそふに、コノうそつきめ

問歳

賈人、娼を買ふ。その歳を問ふ。十八といふ。其明年、又問ふ。十七といふ。又其明年問ふ。十六といふ。賈人、こ

れを聞て、なミだを流す。娼、其わけを問ふ。賈の曰、你歳も、おれのかねじや

性呆

呆婿、妻とつれだちて、泰山へ修謁。丈人、歓で晋待する。（一ウ）其席に生柿子のあるを見て、彼むこ、拿て皮もむかすにむさ〳〵くふ。妻、套房からのぞいて見て、こらへ兼て嘆じて云く、晦気〻〻と。呆人答て曰、苦くハないが、チトしぶいよ

遺劔

医人、劔とすりこ木と取ちがへて、病家に行。病家、大に笑ふ。赤面して、是も荆婦がそれ〳〵の所におかぬ故、かゝる恥をかきますと、急に立て返り、我家をとりちがへて隣へ入、隣の妻を大に鞭つ。コレハしたりと、我内へ返つて、先刻ハ龜相いたしてござる（二オ）

過橋嘘

郷人、城中から帰て妻にはなす。我ハどふいふ事か、けふ城裏て無数、噴嘘か打たと。妻のいはく、皆我が家に在て、你の事を想ふからさと。他日、糞を挑て、危橋を過るとて、連て嘘が打て、失足て、幾乎に落よふとする。ソコデぐつとして罵ていはく、験花娘（騒カ）め。我を思ひおるから、此やうな目にあハす

似茸（二ウ）

医、一婦人を療す。禁物を問ふにおよんで、松茸ハいかゝと。医の曰、さればとよ、松茸ハ害なし。松茸に似たものハこれ大毒

不準

婦人と男子と両口ではなす。婦、男の鼻の大きひを見て、戯けて曰く、你のその鼻では、物もさぞ大きからふ。男、婦人の嘴の小さひを見て、また戯て曰く、你の其口ては、陰もさぞせまからふと。両口ともについ（三オ）動情なつて、丟电雲雨す。婦曰く、你の的ハ鼻とハ准ハぬと。男の云く、你の的もまた、嘴とハ不准

賭謎

初め十金を賭て曰、両角四足、重を負て遠に行物ハ何

そ。曰、牛。次に百金を賭て曰、四足、乗人、百里に行者ハ何そ。曰、馬。次に千金をかけて曰、八足八頭八翼の物ハ何そ。曰、天下に豈かゝるものあらんや。曰、不然。是、怪物しや

公直老人（三ウ）

嫡妻と次妻と平常、争風てどふもならず。丈夫のいはく、我がごとし那個へか一人に就たならバ、偏愛ともいはふが、今夜は手をかへて、我が仰に臥て居やうから、你們の造化にまかせて、我的の向つた方を憑にして、就て去て幹事と。両人ともに領で、たがひに陽物を摸たり弄たりすると、一時興起て、檣桅のやうになる。丈夫、大ひに笑ていはく、この公直老人（四ノ五オ）

（一ウ―二オ）

読汗

ひきやく、書のとゞけ所を忘れ、途中医者に逢、書の標名を請ふ。医、読ことあたハす。わざとそらさぬ貝にて、是まて誰ぞに見せたか。ハイ。そふかして、よみくさして、モフよめぬ

陰陽生

三人同舟する。一ツの尸の流れて来るを見る。一人問て曰く、あれハ男か女かと。一人答て曰、覆は男、仰くハ女と。其尸、側に流れる。アレハ何じや。答曰、男女（四ノ五ウ）

尻奠

夫死して妻、未亡人と称し、日々寺中の墓へ拝、哭す。其状、尻を出して墓側に踞ること久ふす。主僧、訝て其解を問。残花の曰、生前に好し者を奠れば、鬼、必ず饗ときく。亡夫の嗜ところ、是よりふかきハなし。されば奠さふらふと。主僧、頷て曰、大然。四十九日か経たらバ、寺へ上さつしやれ（六オ）

姦娘

老者、孫を領て市へ出る。一妓者の門首をぶら〳〵とありくから、妓が、モシ茶を吃れと。老者、きかぬふりして進去る。孫、公〻に問ていはく、アノ妓子ハ誰じやと。公のいはく、アレハ是娼婦。孫の曰、デモ你を請で茶を吃といふに、ナゼ去ぬと。公のいはく、他ハ我を請で茶を吃せるでハない。我と他と雲雨させて、我が東西を騙さふとするのだと。孫、牢く記へて忘れず。（六ウ）家へかへると、母親が茶を汲で公〻に吃せるを見ると、手を拍て、我は暁得よ。母親が公〻と雲雨させて、公〻の東西を騙さふと

盗盗

ぬす人、金を別んとて、おゝぜひ手下の盗をあつめけるに、忽ち百両の包うせたり。さま〴〵尋ね索せとも、ミへす。盗魁きつと衆盗をにらんで、ハテサテ、こふよつたうちに、盗ミする人あらんとハおもわさりき。（七オ）これからハ油断ハならぬ

陞官

一官、陞職して、其妻に向て、我が官職ハ前から比べては更て大きひと。妻の曰、官が大きくなれバ、此物もまた大きくなるでハないか。官の曰く、自そのはづさと。行事におよんで、妻、ふしぎをたてゝ、是ハやつはり故の通りに小い。官がいはく、大きふなつたことは許多だけれど、你が覚へぬのじやと。妻の曰、（七ウ）如何覚へがない。官

の日、難道、老爺が陞職するに、奥さまが照旧でバなるまい。我が的ばかりでハない、你の的も大くなつた

国学

或人、国学先生に問て曰、妻より夫をさしても君といひ、夫より妻をさしても亦、君といふ。これハ如何なることぞ。曰、いざなぎのキと、いさなミのミとを合して、男女の恋路にハ、互に君といふなり。ハ、アそれですめた。男女互につまとふも、尻のツと茎のマと合したものか（八オ）

有理

問官、いたつて貪る。一日、対鞫をもちだす原告、五十両の金子を餽。被告聞て、倍にして百両を賄托。さて審のときにいたつて官、情由聞ず、籤をふつて、まづ原告を打のめす。原告、手をあげて五指をなして曰、小的ハ理でござりませふと。官、手を以て覆ていはく、奴才め。你、理がありといふやと。又こちらを一仰て、他ハ你に比べては、よつほど理がある

笑合一之終（八ウ）

即当笑合巻之二

東都　舎楽斎述

両坦

男ゑらびの女、適、両家から並求。東の家ハ郎醜くて家富。西の家は郎が美て貧しひ。父母問て曰、誰が処へ適たいと。女の曰、どちらへも。其故ハ。答て曰、我が（九オ）愛なら、東の家で飯を吃、西の家で眠たい

待詔

志賀のおとこ、待詔店へゆきければ、外のおとこをさしおきて、先、しがからさき、といふ。外のおとこの曰、一トつまつのか

両来船

両方から行ちがふ船あり。一人、檻の外へ手を出して、指を夾れて傷になり、帰て妻に訴す。妻、嘆息をつぎながら、嘱ます。今後其やうな事があらバ、切りと（九ウ）記へて居

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com